

出藍文庫

1-1

鷺沢文香のほんの話

近藤貴弥 著



出藍文庫

プロデューサーの運転する車の中で、鷺沢文香は車窓の向こうを流れる景色を眺めていた。夜空は見えない。街路樹の紅葉はもう風に飛ばされ、長い枝を寒空の下に晒している。街灯はクリスマスを待っているように賑やかな緑や赤い灯りを灯している。ミラー越しにプロデューサーを一瞥してみたが、返事はない。文香は窓の外を眺めながら、先程からずっと、同じ言葉を反芻させていた。

文香は毎週木曜日の午後八時から三十分間、ラジオ番組の生放送パーソナリティーに抜擢された。プロデューサーが、初めて文香のために取ってきた仕事。これだったら、きっと緊張せず、きみの魅力を伝えられる、と添えて。

ラジオ番組は、ほとんどが本や本屋や古書店の話をするだけだった。独特な雰囲気と声質と趣味が合致し、鷺沢文香というアイドルは世間に認知されるようになった。今では時々、ゲストとして同じプロダクションのアイドルを招くこともあれば、作家や出版社の宣伝に用いられることもある。

そんな番組を、続けている。今日もいつも通り、最後の挨拶をしようとした時、ブースの

3 鷺沢文香のほんの話

向こう側から一枚のカンペが、文香の元に届けられた。文香は、ブースの向こうから届きま
して、と前置きをして、そのままの文章をリスナーに届けようとした。しかし、言葉は上手
く続かず、ブースの向こうに青い目を向け、

「本当、……でしょうか？」

と問いかけた。プロデューサーは笑顔で頷いた。文香はカンペで口元を隠し、紅くなった
頬を隠すように覆う。

そうして、まだ放送が終わっていないことを思い出し、リスナーに自身の驚きを伝えた。
温かい沈黙の後、文香は恥ずかしさで震える声で、言う。

「この、ラジオが……本になります。それでは、また来週お会いしましょう」

事務所が近付くが、文香はまだプロデューサーの言葉をしっかりと受け止められないでい
た。ふわふわとした夢心地のような。事務所の扉を開ければ、何もかもが昨日に戻るような
バラエティー番組のドッキリに仕掛けられていたことが分かるような。そういう笑い話。

事務所の扉を開けても、何も変わらない。文香はソファへ、プロデューサーはデスクへ。

ちひろからお祝いの言葉と温かい茶を振る舞われた。事務所には、他のアイドルの姿はなかった。ホワイトボードを見ると、皆、もう帰っているようだった。

「驚かせてしまって済みません」

プロデューサーの声は、文香がブース内で動揺してしまったのと同じように、微かに震えている。運転中に声をかけなかったのは、文香にかけるべき言葉を探していたからだろう。プロデューサーは文香の目を見て、続ける。

「驚かせるつもりはなかったんです。ただ、鷺沢さんにどう伝えるのがいいかな、と考えた結果です」

プロデューサーにそう言われたが、納得できなかった。

「そうですか」

吐き出した言葉の節々には、隠しきれない棘のようなものがあり、文香は反射的に謝りそうになった。悪いのは、そういうことを仕掛けたプロデューサーであり、文香は謝られる側だろう。謝罪の言葉を飲み込むと、広い事務所に沈黙が降りてきた。

5 鷺沢文香のほんの話

プロデューサーはそれ以上、話さない。他のアイドルの仕事の調整やスケジュールの確認をしている。文香は早くなった鼓動を落ち着かせるように、鞆の中に入っていた本を取り出す。ストールを膝にかけ、本を読む。

キーボードを叩く音や紙を捲る音が、事務所に響く。文香もプロデューサーもおそらく、いくつかの言葉を話さなければならぬような気がしたが、二人は不思議と沈黙を貫いた。どちらかが口火を切るのを待つように、仕事と読書に始めたようだった。

文香の鞆には、いつも本が入っている。自分で買った本でもあれば、仕事の台本や脚本であつたり、図書館で借りた本であつたり……。しかし、木曜日は一冊の本しか入れていない。ラジオで紹介する本。文庫本から単行本、新書に論文。一度や二度、雑誌を紹介したことがあつたのだが、プロデューサーから雑誌はやめておこう、と言われ、以来雑誌は入れていない。

このラジオの構成するのは三つのコーナーしかない。挨拶、本の紹介、リスナーからのお便り。この仕事を聞かされた時、プロデューサーに、私でいいのでしょうか……。と尋ね

た。そこには、二つの意味があった。一つは文香が適任であるのか、ということ。もう一つは、これがアイドルのやる仕事なのだろうか、ということ。文香のイメージしていたアイドル像とは全く違った。文香のイメージしていたアイドルはもっと人前に出ている。丸まった背中ではなく、視線を本に落とすのではなく、もっと遠く見ている。そんなイメージだった。文香のその疑問は、言い換えれば、不安の現れであった。アイドルとして、自分は認められるだろうか、と。文香の不安は杞憂で終わり、ラジオは長く続いている。他の仕事も、少しずつ増えている。しかし、本を書く立場になるのは、初めてだった。数多あるであろう仕事の中で、プロデューサーは何故、執筆という仕事を文香のために取ってきたのだろうか。文香には、分からなかった。

プロデューサーの唸り声上がる。文香は静かに本から視線を外し、気遣うように見守る。何故、という言葉は喉から出ず、文香の胸に残る。プロデューサーは恥ずかしがるように笑うと、何でもありません、と仕事を再開する。文香も何も答えず、ページを捲る。二人の間に、会話は無い。心地良い静寂だけが、事務所にあった。

その静寂を破るのは、いつも、ちひろだった。プロデューサーと文香に、時間を知らせるのは、三人だけの間でいつの間にかできた約束のようだった。文香はちひろの柔らかい声を聞き、もう随分と夜が深くなっている、と気付かされた。木曜日に生放送がある関係で、金曜日の講義は三限から始まるようにした。もう少し、事務所でもいいだろう。プロデューサーもまだ仕事が一区切りついていないようで、デスクから動く気配がない。

読書を再開しようとしたが、また静寂に満たされるのを恐れた。ここで声をかければ、プロデューサーに声をかける機会を失ってしまいそうだった。

ちひろによって破られた沈黙のお陰で、ようやく、文香はプロデューサーに訊いた。

「本当に、本に、なるんですね」

「意外ですか？」

「……まだ嘘のように思えます」

文香は本を鞆にしまい、ソファの端から少し真ん中に寄る。プロデューサーは手を止め、デスクから数枚の書類を引き出すと、文香の正面のソファに腰掛けた。

書類の日付は随分と前だった。そこには、文香がパーソナリティーを務めるラジオのことがあり、書籍化のことも書いてあった。ラジオはどうやら、書籍化を一つの目的として動いていたようだった。けれども、仮称や未定の文字が幾つも見える。これで、企画として通ったというのが不思議だった。

文香がこのラジオのパーソナリティーを任された時、書籍化のことなど聞かされていなかった。

「どうしてでしょう？」

訝しむようにプロデューサーを見上げる。プロデューサーは柔和に笑う。

「最初から伝えてしまえば、緊張するでしょう？」

「……はい。ですが」

「今度からは、ちゃんとお伝えします。それに、書籍化は時間がかかりますので……」

「ありがとうございます」

礼を言った一方で、文香はこういう疑問を懐かざるを得なかった。文香がアイドルになっ

たのは、この企画があったからではないか、と。この企画がなければ、文香はアイドルになれなかったのではないか、と。文香は他のアイドルと比べて、人前に出ることが得意ではない。感情を乗せて歌うのも難しいと思っている。キレの良いダンスはもっと難しいと思っている。容姿は良いと褒められたことがあるが、自分ではよく分からない。つまり、鷺沢文香という少女は、アイドルに向いていない少女なのであった。その文香が、今では、アイドルとして活動している。

文香は改めて、プロデューサーに礼を言った。プロデューサーは不思議そうに微笑した。「鷺沢さん、そう気負う必要はありませんよ」

今度は、文香が不思議そうに微笑する番だった。ええ、とだけ短く返事をした。プロデューサーは、文香に訊く。

「鷺沢さんは、どういう本にしたいですか？」

「どういう本、ですか？」

「あなたの本ですから、あなたの思いを聞き逃したくありません」

「私の、本……」

文香はまだその実感が湧いてこなかった。叔父の手伝いで古書店のレジに座ることがあった。叔父はそういう時、何か書き物をしていることが多かった。小冊子の原稿、と叔父が教えてくれた。古書店の店主がある事柄について話す、というものだった。バックナンバーを幾つか読んだことあるが、国内の古典文学についてだとかラテンアメリカ文学についてだとか、映画についてだとか、そういう小冊子だった。文香はそんな叔父の背中を見守りながら、店番をしていた。

今、その背中を見守られる立場になっている。家族でも友人でもない、仕事の人に。文香の顔は幾分か強張った。

プロデューサーは固くなった文香の顔を見て、優しい言葉をかけてくれる。

「難しく考えなくて大丈夫です。本の中心的な部分は、今までのラジオです。文字起こしは僕が行います」

プロデューサーにそう言われると、文香の緊張は少し和らいだ。

「私は何をすればいいんでしょうか？」

「大きく分けて三つあります。一つは、僕が文字にした文章がおかしくないか。一つは、『はじめに』と『あとがき』を書いていただくこと」

プロデューサーは言い淀むように言葉を切った。文香は自然と訊く。

「最後の一つは？」

「写真撮影です」

固い声で答えたプロデューサー。文香は小首を傾げた。

「何の写真でしょうか……？ これまでの本ですか？」

「鷺沢さん、本の表紙に使う写真です」

「地味ですか？」

「地味です」

苦々しい顔で言い切ったプロデューサーに、文香は隠れるように笑った。それから、困りましたねえ……、と呟いた。プロデューサーは文香の心情を慮るように、一つ一つ丁寧に言

葉を並べる。

「鷺沢さんはアイドルとして活動するために、ここに在籍しています。ラジオのパーソナリティーも活動の一つと十分にいえるでしょう。ですが、それがアイドル活動の全て、というわけではないと思います。鷺沢さん、あなたが思い描くアイドルというのは、どのようなアイドルでしょうか？」

問われ、すぐに答えられなかった。文香はアイドルという職業をよく知らなかった。そういうふうに輝く彼女達を知る機会が多くなかった。文香は彼女達の影で本を読んでいた少女である。文香にとってしてみれば、今日プロデューサーから教えられたことは、アイドルよりも大きな仕事であった。が、文香はアイドルとしてこのプロダクションに所属している。

ラジオのパーソナリティー、文筆活動。それらの活動は、きつと、アイドルの活動のようで、アイドルの活動のように見えないのだろうか。世間がアイドルに求める活動は、もっと別のところにある。声、を届けるだけではない。文香は自信なさげに答える。

「やはり、テレビや映画でしょうか……？」

「テレビや映画の他にも、歌があったりします。ですが、それだけではありません。鷺沢さん、一つ、可能性を広げてみませんか？」

「それが、本とどう繋がるのでしょうか？」

「本の表紙は、あなたです。あなたの姿を写真に撮り、表紙に飾ります」

プロデューサーにそう言われ、文香は固まった。今日は驚くばかりだ。不思議な浮遊感が、文香を包み込む。寮に帰れば、大学へ行けば、本を読めば、文香の日常は帰ってくるだろうか。何度も何度もプロデューサーの言葉が、頭の中を巡る。書籍、本、表紙、写真……。文香は今まで、ただの読者であり、愛好家であった。そんな自分が、書籍を発行するに至った。しかも、自らを表紙にして。慣れ親しんだ世界が、別世界に変わってしまうようだった。

プロデューサーの言っているそういう本を、文香は度々書店で見掛けたことがあった。同じプロダクションアイドルの写真集が平積みになれているのも見たことがある。書籍化されるのはラジオにやっている書評であり、写真集ではない。もし本当に、文香が表紙を飾ることになってしまえば……。

「まるで、アイドルみたいではありませんか」

隠れるように俯く。重たい前髪が、文香の視界全体を覆う。耳の端まで、熱い。

まだ自分には早いように思う。このプロダクションに所属して、アイドル候補生として数々のレッスンを行い、アイドルになった。そういうことを思い返すと、文香はもうアイドルと呼ばれてもおかしくない。しかし、今の文香はアイドルと呼ばれるよりも、ラジオパーソナリティーと呼ばれる方が性に合う。そんな自分が、書籍の表紙になる。恥ずかしくてどうにかなくなってしまおうそうだった。

文香は辛うじて、細い声を上げる。

「もう、決まったことなんでしょうか？」

「事が事ですので、案の内に留めてあります。もし、他に良い案があるのでしたら、デザイナーの方と相談して考えます」

「もし、他に……」

言い換えれば、他に良い案がなければ、文香が書籍の表紙を飾ると考えても間違いではな

いだらう。混乱する頭で、文香は何冊もの書評本の書影を思い出した。それらの書評本は、いずれも落ち着いたものだった。プロデューサーの言葉を借りるのならば、地味という言葉が合うかもしれない。

文香はそれでも良かった。自分はそういう人間だと思っている。しかし、きっと、世間は鷺沢文香をアイドルとして見ている。そんなアイドルが、書評本を出す。しかも、自分の姿を表紙に携えて。

果たして、どうなるのだろうか。快く迎えられるのだろうか。分からない。ラジオの放送を終えてから、文香は沢山の分からないに出会っていた。沢山の分からないと出会っているが、文香は一つ分かっていることがある。文香がアイドルという自身の可能性を一つ広げたように、プロデューサーも新しい可能性に挑戦しているということ。文香が最も好み、力を発揮できるであろう分野。その思いを、恥ずかしいから、という理由だけで断りたくない。プロデューサーは文香の可能性を一つ、また一つ広げようと試みてくれる。ゆっくりと文香を新しい世界へ案内してくれる。一人では足が竦み、動けなかった世界へ、手を添え、時に

は足並みを合わせ、時には背中を押して、見せてくれる。重たい前髪の向こうを、活字以外の世界で照らしてくれる。

「返事は後からでも構いません。鷺沢さん、そろそろお時間ですよ。送ります」

プロデューサーは返事を急がせることなく、荷物をまとめる。文香を寮まで送り届けるのも、プロデューサーの仕事の一つとなっていた。

初回放送の後、プロデューサーに事務所に戻ってほしいと頼んだ。事務所に戻った文香は本を読み直し、ああいう言葉で良かったのだろうか、ああいう紹介で間違ってたのだろうか、と思い返しながら読む。紹介が不十分なところがあれば、来週のラジオの冒頭で話してもいいかもしれない。あるいは、番組の公式SNSで説明しても良いのかもしれない。

そんなことを考えながら本を閉じた時、プロデューサーがまだ事務所に居たのには心底驚かされた。文香の、何故、という眼差しに、プロデューサーは笑って答えた。

『何度か声はかけたんですがね。鍵を置いて、所属アイドル一人を残して、先に帰るのは失礼でしょう』

それから、二人の間で、ラジオの後は事務所に戻るといふ決まりが自然と生まれた。けれども、あまり長居するのはプロデューサー的に好まないらしく、時折、こうして帰るように促された。

事務所から車に乗り込む最中、文香はふと足を止めた。見上げた夜空は、どこまでも澄んでおり、幾つもの星が見えた。名前の知っている星もあれば、名前の知らない星もある。文香の瞳には見えていないが、夜空には幾つもの星がある。

瞬く星に名前があり、物語があることを、文香は遠い昔、叔父から聞かされたことがあった。名前も姿も見えない星にも、物語がある。輝く時を待っているように、佇んでいる。いつか、文香にも見えるようになる時が訪れるだろうか。今、その星の名前も位置も分かっていない。その時が訪れた時、思い出せるだろうか。

プロデューサーに声をかけられ、文香は何でもないと答え、車に乗り込んだ。少しの沈黙を経て、文香はプロデューサーに、ある星の話をした。輝く時を待っている、星のことを。遠い夜空の向こう、一つの星の話。いつかの寓話であったか、神話であったか、星の話

であったか、はっきりとは思い出せない。あるいはそれらが全て混ざった文香の創作か……。そういう星の話をした。プロデューサーは文香の語る物語を聞き終え、良い話ですね、と微笑した。文香は小さく笑い、そうですね、と返した。それから、車内はいつも通りの静寂を取り戻した。

※

プロデューサーが文字起こしたをした文書は、寮のポストに定期的に届けられた。追記をした部分も合わせて入っており、採用するかしないか、という文章も書かれていた。

文香はそれらの文書を受け取り、昔を思い出していた。初回放送は酷いものだった。プロデューサーの説明も酷かった。好きな本の話をしたらしいです。それだけだった。ジャンルも何もない。相手がいるならば、その方に向けて話すのだが、ラジオは不特定多数に向けられた。不特定多数に向けて話すのは初めてだった。生放送も初めてだ。自分の好きな本につ

いて話すのすら、初めてだったような気がする。初めて、で彩られた放送。文香が大いに焦り、慌てて、ほとんど喋れなかったのは当然過ぎるほどに当然だった。自分の好きな本の話は、ほんの僅かさえもできなかった。タイトルと著者と概要が伝えられた程度だろう。

それが不思議とブースの外では好評だった。新人のアイドルらしい、と笑われた。その笑いは決して嘲笑でなく、温かな笑みだった。文香には全然分らない笑みだった。しかし、凄惨極まりない放送が、こうして迎えられたのは、文香に安堵をもたらした。

文字に起こされた言葉を読むと、今と比べて随分と下手だった。恥ずかしさを通り越し、乾いた笑みすら零れてくる。落ち着こうと思って、沈黙してしまうことが何度か見える。あまりに長い沈黙が続くと、ブースの外から指示やカンペが飛んでくる。そうして、また話すようになる。

誰かに用意された言葉を喋る方が、ずっと楽だった。文香がラジオの原稿を用意するようになったのは、そのことに気付いてからだだった。本のタイトル、著名は勿論のこと、出版社に依じて違う時は出版社のことも原稿に落とし込むようになった。それからの放送は初回と

比べて、良くなった。それでも、話したいことと話さなければならぬことの区別がつけられず、三十分という時間の短さを痛感した。

プロデューサーは、きみの魅力を伝えられると言っていたが、自分の魅力というのが分からない。他のアイドル活動よりも、本のお話をするラジオの方が気楽であり、趣味の面が強く、性に合っていると思う。けれども、文香の力では、紹介する本の魅力を欠片も伝えられない。

文香の話す本は、文香の言葉よりも、沢山の魅力に詰まった本である。小説と一言でまとめても、ジャンルは多岐に渡る。美しい文章で彩られた宝石のようなものもあれば、物語であつと驚かされたり、心を揺れ動かすものもあつたりする。また、何気ない日常の瞬間を摘み取るものもあれば、自分達の暮らしを見つめ直す機会を与えてくれるものもある。新書となれば、更に幅が広がる。

それらの本は、常に文香を新しい世界へ案内してくれた。しばしの幸せを、恍惚感とすら言えるような時を、与えてくれる。

しかし、文香の言葉は、文香の胸に届かなかった。自分が味わった感動を再構築してみたが、どういふところに心を揺り動かされたのかと話しても、全然綺麗にイメージできなかつた。自分の言葉に、自分が納得していなかった。

こうして、読み返すと一層強く思う。最初に紹介した本は、文香が最も思い入れが強い本。文香が最初に読んだ本。星と数々の物語を、小さな文香に教えてくれた。叔父が文香に渡した一冊の本でもある。叔父は読書を好んだが、同じように文香を可愛がってくれた。分からないことを訊くと、何冊の本を読み聞かせ、教えてくれた。やさしい人。だからか、文香はこの本をやさしい本だと思っている。

夜を切り開いてくれる明るい本でありながら、読者をやさしく導いてくれる。物語に至る前に、星という天体について教え、古代の人々はその星に祈りや願いや物語を託した、と教えてくれる。

長野の実家は空がよく見えた。ずっと向こうまで見渡せた。この本を読み終えた時、自然と空を見上げた。まだ、夏の真昼。雲一つなく、陽の光が痛々しいほどに照りつける。あま

りの眩さに、顔を背けた。居間から流れってくる天気予報は、快晴が続くと報じてくれる。夜が、楽しみになった。

本は文香に沢山のことを授けてくれた。知識だけではない。本の内から、文香は世界を知った。世界が沢山の色で彩られ、沢山の不思議で溢れ、沢山の人で出来上がっていることを、本に教えられた。

文香の言葉は、その僅かも伝えられないようだった。伝えようと躍起になっても、掌の間から零れ落ちるよう。きっと伝えられていると思っても、不安で仕方がなかった。

書き起こされた言葉を追いかけるのが辛くなり、本棚の背表紙を追いかける。いずれもラジオで紹介した本。紹介するよりも前に読んでいた本。紹介した後にも読んだ本。

一冊の本を手取る。短編集だった。遠い昔、文香が生まれるずっと前に編まれた一つの物語。頁を捲ると、葉を挟んでいたかのように、数々の言葉が蘇る。それらの言葉は、短編の内で繰り返し広げられた言葉ではなかった。文香がラジオで語った拙い言葉もあれば、プロデューサーの、昔読んだことがある、という言葉もあった。翌週にリスナーから送られてくる

お便りの言葉もあれば、生放送の最中や直後に呟かれる言葉だった。

彼等の言葉は、本に新しい風を吹き込んでくれた。どこをどう面白いと思ったのか、良いと思ったのか、何で知ったのか、いつ読んだのか、誰に読ませてもらったのか。ある一冊の本から、幾つもの人間模様が展開されていった。

ある一つの物語から、全く異なる物語に光が注がれる。そうして、その物語が文香の元言葉と共に届けられる。文香の胸は不思議な温かさで一杯になった。

文香はプロデューサーに連絡を入れる。すぐに繋がった。

「はい、何かありましたか？」

心配するプロデューサーに、文香はまだ熱を帯びた言葉を返した。

「書き直しても、良いでしょうか？」

「詳しく説明してもらっても構いませんか？」

「プロデューサーさんの文字起こしを読んで、思ったんです。きっと、この本から新しく私を知る人もいるのではないかと。ですので、同じ言葉で、……昔の言葉をそのまま載せる

ようなことは、少し、その人達のことを、考えていないような気がするんです」

僅かな沈黙の後、プロデューサーは文香の気持ちに寄り添ってくれた。プロデューサーとしての役目を忘れることなく。

「お気持ちは分かります。分かりますが、一五十冊程度の書籍を紹介します。今から書き直して、間に合いますか？」

今から書き直し、どれほどの時間がかかるかどうか分からない。文香の手元にはまだ、初回放送の分しか来ておらず、その書き直しすら終わっていない。後、一四九回分来ると考えられる。それらを確認し、書き直す。理解の範疇を超えている文章量だった。

突然の提案に頭を痛めているであろうプロデューサーは、そんな素振りを見せず文香に助け船を出す。その声はプロダクションで聞いた声より、幾分か冷静で、冷たかった。文香は出過ぎた真似をしたのではないか、と恐ろしくなった。済みません、と謝りたくなった。謝らなかつたのは、プロデューサーの言葉が、文香の胸に残っているからである。

この本は鷺沢文香が書く本である。

プロデューサーの声が冷たいのは、電話の通しているせいだろう。と、思い込むことにした。

「鷺沢さん、焦ってはいけません。焦ったところで、良い文章は書けません。明日、明後日は精神論で乗り切ることも可能でしょう。ですが、その思いをずっと維持するのは、すごくしんどいことです。他の方でしたら、止めなかったと思います」

段々とプロデューサーの声は柔らかくなったが、言葉の端々から熱が溢れてくる。

「ですが、僕は、そのような無茶を覚えさせたくありません。まだ十代の女の子に、そのような無茶をさせたくありません。そういう方法もあるんだ、と体験させたくありません」

プロデューサーは怒っているように感じた。文香は部屋の隅で、身体を小さく丸める。ぎゅっと小さくなって、外との関係を遮断するように。

どこで、どんな顔をして、文香の言葉を聞いていたのだろうか。男の人に、はっきりと自らの意思で、自らの思いを伝えたことは多くない。その言葉が、火に油を注いってしまったような経験は、文香の記憶にない。

もし、プロデューサーが一冊の本ならば、きっと分かった。本は、言葉以外の情報を持っている。文香もラジオの中でよく話すことがあった。紙の手触り、文字の印象、表紙のデザイン……。

プロデューサーは、例えるのならば新書だった。それなりの分厚さがある、少し難しい言い回しがある新書。本屋で平積みされるようなものではないが、誰かの家の本棚で、そのと背表紙を見せている。そんな本。

電話の向こうのプロデューサーは無言だった。きっと、文香の答えを待っているのだろう。文香の言葉は、喉で詰まり言葉にならない。いつまでも無言の二人。二人にとって、適切な距離感のようだった。しかし、電話中となればそういうわけにはいかない。

「……鷺沢さん？」

「……言い過ぎてしまいました」

文香の沈んだ声音に、プロデューサーは慌てて言葉を繋げる。

「あ、いえ、そ、そんなことはありませんよ。僕の方こそ、済みません」

「謝るのは私の方です。プロデューサーさんも大変なのに、私……。舞い上がっていたんです、きっと」

「鷺沢さんだけではありませんよ。企画をしたのは僕です。鷺沢さんだったら、この企画でも良いんじゃないか、と思ったんです。新しい鷺沢文香の魅力を、他の媒体でも伝えられるのではないかと。僕も、あなたと同じように舞い上がっていた一人です。あなただけのせいじゃありません」

プロデューサーの優しい言葉に、文香の唇は小さく柔らかい弧を描いた。先の重たい空気は、もう電話の向こうにない。文香は安心してゆっくりと息を吐いた。プロデューサーが笑った。それから、こういう言葉を文香に送る。

「最初の方は、独特な番組だったと思います。非常に新鮮で、今とは全然違った面白味が溢れていました。今の鷺沢さんからしてみれば、それはきつと書き直したいことだと思えます。よく分かります。僕も昔、担当していた方の企画を今読むと、それはもう……。同じ気持ちです」

「そういうものなのでしょいか？」

「そういうものなんです。ですが、全てを書き直すのは勿体ないと僕は考えています。今のあなたは、随分と良いアイドルになろうとしています」

自信をもって言うプロデューサーに、文香の身体は熱くなる。

「その姿だけを見せたい気持ちも分かります。ですが、昔のあなたももっと大事です。今のあなたと同じくらい、大事です。鷺沢文香というアイドル、あるいは一人の読者が、どういふふうに一冊の本に触れてきたのか、その足跡も大事だと考えてます。ですので、不要な部分は削り、書き加える、にしませんか？」

「書き加える……」

「そうです。難しくないとしますが？ 全く新しく書き直すのは負担が大きいです。ですが、書き加える、という程度でしたら、きっと負担は少ないと思います」

電話の向こうで柔らかく笑うプロデューサーの姿が見えた。プロデューサーは上手くイメージできているのだろうが、文香には上手くイメージできなかつた。書き加える、という方

が難しいとすら思っている。何を残し、何を書き足すのか、という判断をしなければならぬ。過去の自分を見つめ直すということは避けたかった。プロデューサーの言葉を借りるのならば、今の鷺沢文香だけを、を見てほしかった。

プロデューサーの言葉に異議を唱え、書き直すと言えないのは、一人の読者がどのような思考を得て一冊の本に触れてきたのか否定したくなかった。一人の読書家として、その言葉を否定したくなかった。どう書き加えればいいのか、分からなかった。文香は既にこの本を何度も読み、時として新しい考えに出会うこともある。どの段階の、どの考えを言葉に書き記せば良いのだろうか。この本の魅力を一番伝えられる言葉を選べばいいのだが、短い言葉でまとめるのが、難しかった。

「プロデューサーさん、少し、相談があるのですが」

文香はそう伝え、プロデューサーと事務所で落ち合った。文香の手には文字起こしされた原稿や何冊の本があり、プロデューサーのデスクにはこれから文字起こしをしようとする音声データや文書ファイルがあった。

プロデューサーは幾つかの文書を手に、文香を会議室へ通した。小さな会議室は、プロデューサーと文香の言葉ですぐに満たされた。どういう言葉を書き足すのか、どういう言葉を取り除くのか、プロデューサーの言葉に感化され、全く別の考えが巡ってくることもあった。文香の冬休みは、本と共にあった。アイドル活動を始める前に戻ったようであった。古書店で店番をしながら読み耽っていた日々。自分のためにだけに読んでいたあの日々。今でも自分のために読んでいることがあるが、誰かのために読んでいることもある。

木曜日に向けて新しい本を読み、注釈等を用意することもある。書籍のためにプロデューサーと机を挟んで話すこともある。互いに同じ本を持ち寄り、意見を交換した。プロデューサーは決して自分の意見を強く言うような人ではなかった。文香の言葉を聞き、原稿を読み直し、訂正や修正を加えるのが主だった。

冬休みは文香が思っているよりも早く過ぎ去っていた。去年の冬休みはもっと、ゆっくり過ぎた。長い休みになると文香は決まって、叔父の古書店で過ごした。実家にも本があるのだが、叔父の店には読んだことのない本の方が多かった。他の古書店にも近いという理由も

あった。文香の周りには自然と古書や古書店の情報が集まった。幾つもの情報から、自分の読みたい本を読みたい時に読んでいた。

が、今は中々そういう時間を作るのが難しい。ラジオだけならば難しくないのだが、書籍のこともある。一冊の本を作り、世に出すという行為が、これほど時間がかかるものだとはいえ、考えもしなかった。文香は苦笑を浮かべ、原稿を書き直す手を止めた。

プロデューサーから送られてくる原稿を書き直す日々は、骨が折れる。パソコンに向かってキーボードを叩く。そんな時が何時間、何日と続く。送られてくる原稿は絶えず一定間隔で、文香はいよいよプロデューサーが機械でできているのではないかと疑うようになった。しかし、会議室で本の話をしている時、血の通った人間であることを教えてくれる。プロデューサーは文香の話聞き終えた時、鷺沢さんはこの本をそう読むんですね、と驚く姿をよく見た。僕もこの本を読んだことがあります、と笑顔になるのもよく見た。あるいは、この作者の別の本を読んだことがある、と申しわけなさそうに言うこともあった。

プロデューサーは小説や新書に馴染みは薄かった。その分、理数分野では文香の知らない

ことを沢山知っていた。ある数式や学者の話、物理現象の話……プロデューサーが楽しそうに話す度、文香は呆気にとられた。同時に、何故この人はこのような所でプロデューサーとして働いているのだろうか、と疑問にすら思った。もっと適切な所で働いてもいいのではな
いか、と。呆気にとられる文香に気付くと、プロデューサーは恥ずかしそうに笑った。

冬休みが一日、また一日と過ぎるということは、本の締切が一日、また一日と近付いてく
ることを意味していた。文香はプロデューサーの言葉を守っていた。すなわち、焦らないと
いうこと。焦っても文章は書けないということ。無茶をしてはならないということ。文香は
それらの言葉を守り、一字、また一字とタイピングを続ける。

そういう日々が続くと、水曜日の夜から木曜日の夜という時間が不思議な清涼剤になっ
ていた。本を選び、読み直し、話す。リスナーからのお便りに励まされることもあった。

原稿を書き直す時、文香はほとんど一人だった。一人で過去の己と向き合い、修正を加え
る。昼も夜もなく、黙々と。そんな日がずっと続くのは、辛いものがある。文章を読むだけ
ならば、辛くない。過去の自分を顧みるのが心苦しい。過去の自分の読み方に新鮮な驚きが

生まれる一方で、誤読を発見することもある。本を出す者は、皆、このようなことを体験しているのだろうか。一冊の本の中で、文香は後何度、過去の自分と向き合わなければならぬのだろうか。

そんな日々を、木曜日が変えてくれる。自分の書くものを楽しみにしてくれる方がいることを、教えてくれる。楽しみ、頑張ってください、そんな短い言葉が、支えになった。

キーボードを叩き続けていると、不意にプロデューサーから連絡が入った。表紙の撮影日時の調整について、と。年の瀬も近く、早い内に撮影を終わらせたい、というニュアンスがプロデューサーの文章から見取れる。

文香の顔に緊張が走った。このプロダクションに所属する時、写真を撮った。ラジオの生放送のパーソナリティーに決まった時も、写真を撮った。いずれの時も、時間がかかった。カメラマンから、表情が硬いと言われた。そう緊張しなくてもいい、と微笑されたこともある。

月はもう高いところに昇っている。欠けた月の前を薄い雲が流れる。窓を少し開けると、

冷たい風が忍び込んできた。文香の顔は強張ったままだった。

連絡を入れれば、プロデューサーは返事をしてくれるだろう。写真を撮られたくないと話し、プロデューサーは納得してくれるだろうか。きっと、納得してくれないだろう。文香がそういうメディアへの露出が苦手なことは、プロデューサーも理解している。しかし、言ったのが今回のことなのだ。

やはりできない、と断るのも良いかもしれない。が、断った時に、代案を持って来るのは文香ではない。走り回るのはプロデューサーだ。

この本は、きつと、鷺沢文香の名で出版される。この本が出るまで、どれほどの人間が関わったのか、ほとんどの読者は知らないだろう。知る必要がないのかもしれない。けれど、文香は知っている。この本は、文香一人で作っている本ではない。自分一人で作っているのなら、都合の良いように調整しただろう。表紙を文香が飾ることも考えなかっただろう。

鷺沢文香というアイドルの可能性を広げるために、とプロデューサーは言っていた。プロデューサーは、文香に新しい世界へ飛び込むチャンスを与えてくれる。こういう世界もある、

と教えてくれる。

文香一人では到底踏み出せない世界を教えてくれた。そんな人が、鷺沢文香というアイドルの可能性について考えてくれた。逡巡してしまうが、断りたくなかった。次は、どのような世界を見せてくれるのだろうか、と気になるのは確かである。

ならば何故、返事ができないのかとなると、写真を撮られるということに慣れていないためである。自らを客観的に捉えるということが苦手だったからだ。

文香はそつと窓を閉め、プロデューサーに連絡を入れた。電話口のプロデューサーの声は、文香の表情と同じように固かった。二人の間に沈黙が生まれた。すぐに言えるであろうと思っただけは、喉で引っ掛かり言葉にならなかった。プロデューサーは急かすことなく、文香の言葉を待ってくれる。どういう連絡なのか、もう分かっているからだろう。

文香は緊張をほぐすように大きく息を吸う。夜気が、引っ掛かっていた言葉を揺する。

「表紙の撮影、受けようと思います」

電話口のプロデューサーから、歓喜の大声が上がり、文香は思わず顔を顰めた。それから

優しく、夜ですよ、と微笑んだ。

※

「少し休憩しましょうか」

プロデューサーにそう言われ、文香の緊張はようやく解けた。カメラのレンズを向けられるのはいまだ慣れない。じっ、と見られているような感覚を覚える。人の目が一つ増えたような、そんな不気味さ。同じプロダクションの先輩アイドルが笑顔でポーズを繰り返しているのを見たことあったが、とてもだが真似できなかった。後から、プロデューサーに彼女が元モデルだということを教えてもらった。

プロデューサーはカメラマンに一声かけ、スタジオの端で声を潜めて話している。耳を澄ませてみると、どうやらイメージの話のすり合わせをしているらしい。

一人残された文香は借り物の衣装を汚さないように、そっと背景布から離れる。全身を撮

るかもしれないと少し高さのあるヒールをスタイリストの手により選ばされたが、どうも歩きにくい。立ち姿が綺麗に見えるから、と言われたが、足に変な力が入り、歩きにくい。やつのことで、椅子に腰掛ける。衣装に変な皺が入らないように、ゆっくりと。

スタジオは二階建てになっており、上の階にはまた別のスタジオが用意されている。階段近くの壁には矢印があり、クラシカルやらキュートやらホワイトやらレトロやらと示されている。

自分がこんな所に足を運ぶと思っていなかった。脇に置いてある鏡で改めて自分の顔を見つめると、どうも自分の顔のようではない気がする。髪型が普段と全く違う。あれほどあった重たい前髪は適度に左右に流され、眉間に小さな房ができている。白い額がここまで露わになったのは、初めてだった。微かに汗が浮かんでいるのすら見えた。

目もいつもよりも大きく見えるが、過度な緊張を受け潤んでいる。ふっと息を吐くと、白い頬が震え、形の良い唇から、か細い息が漏れる。

別人になったようだったが、硬くなった顔は変わらなかった。

「どう?」

「……緊張してしまいます」

スタイリストに声をかけられ、正直に答える。緊張という一言にまとめたが、その緊張には幾つもの思いが合わさっていた。申しわけなさや不甲斐なさ。自分ではどうしようもないという諦めすら。こうなると分かっていたのは、文香の他にもう一人。あるいは、この人も……。あるいは、カメラマンもこうなると分かっていたのではないだろうか。ここに居る者全員が、こうなると分かっていたのではないだろうか。文香は誰よりも、こうなると分かっていた。しかし、解決策は何も浮かばなかった。この何かの糸口として使えるであろう与えられた休憩時間の使い方が分からなかった。

テーブルに置いていた鞆から、本を取り出そうとしたが、そういう気分になれない。

スタイリストは文香の前に腰掛け、文香の顔を見て満足気に笑う。愛想笑いで返すと、こう訊く。

「今日はどんな話をするの?」

「今日……?」

「木曜日でしょ? 今日」

思わず顔を伏せたが、いつもある前髪は文香を守ってくれない。視界の端でスタイリストの細い顎が揺蕩う。

こんな身近に、リスナーがいると思ってなかった。しかも今日は表紙撮影のことがあり、ちゃんと選べていない。文香の鞆の中には、版型の違う本が数冊入っていた。文香は咄嗟に、こういう返しをした。

「今日は、少し特別です。聞いてくれますか?」

文香はそう言って、鞆の中から数冊の本を取り出した。どうして、そんなことをしているのか文香自身分からなかった。きつと、こんなことはしてはならないだろう。皆、文香のために動いている。アイドルという意識が欠けている、と思われることだろう。けれども、文香の仕事はこの撮影だけではない。

スタイリストも言っていたように、この後も仕事がある。それも生放送で、誰が聞いてい

るの分からないラジオ番組。この撮影も失敗するわけにはいかないが、生放送の失敗はもつといけない。また、あんなことになるのは避けたい。

文香はスタイリストと目を合わさず、本に目を落とし、弱々しい声で語る。

「この本は、あなたもきつとご存知だと思います。最近、映画化されましたね。ご覧になりましたか？」

「あ、それ知ってる。観た観た。主演の方がかっこよくて、好き」

「私も同じプロダクションの方と観に行きました。彼女から、本を貸してほしい、と頼まれたこともあります。その時、彼女に訊かれました。どうして二冊あるの？ と。単行本の装画に目を惹かれ、買いました。ですが、単行本は少し重さがあるんです。そこで、携帯性にも優れている文庫本も。と説明しますと、笑われました……。中身は一緒なんでしょう？ と確認された時は、思わず熱弁を振るってしまいました」

弱々しかった声はいつしか穏やかな調子を取り戻し、文香の手は自然と文庫本を開けるようになった。

「私がこの先生と出会ったのは、もう随分も前です。まだ高校生の時だったでしょうか？ 本屋で平積みになっていたのを覚えています。今思うと、ドラマ化の記念として置いていたんでしょう。私にとって、この先生は新しい先生でした」

「新しい先生？」

「その時私が読んでいたのは、棚差し……こうして背表紙しか見えない本でしたので、色言いや文章の組み立て方が新しく見えたんです。そういう言い回しが、少し昔を思わせる文体とのギャップを引き立て、ミステリー部分以外も面白く感じました。このあたりですね……」

文香はそこで一旦言葉を区切り、小説の内から一節引用する。犯人が明らかに、刑事に慟哭する場面だった。何が違うのか、と。何故、と。どうして、と。きみだけが正義なのか、と。文香の声音は自然と力強いものになっていた。

引用を終えると、文香は一層声のトーンを落とし、続ける。

「そのギャップ……ミステリー以外の部分で人を選ぶと教えられたのは、映画が公開された

時のことでした。その方は、映画を好んでおりました。私が本を好むように。ですので、まず映画がありました。私には書籍がありました。私達は一本の映画を観て、一冊の本を読み、非常に沢山の言葉を交わしました。今話せるのは、これくらいです」

「次は？」

スタイリストの視線は、他の表紙へと落ちていた。そして、あ、その本気になる、と呟いた。文香は、これですか？ と正方形の本を手を取った。

「変わった形ねえ……」

「見たことありませんか？」

「あんまり」

「これは、レシピ本です」

文香はそう言って頁をべらべらと捲る。

「……レシピ本？ あ、ほんとだ」

「このレシピ本は、はしがきにも書いてありますように、簡単で自炊初心者向けです。恥

「ずかしいことですが、こうして働くようになってから規則正しい生活とは疎遠になってしまいました。休みの日も……」

「あー、だよー。しかも、気を抜くと……。文香ちゃんダイエットとかしてる？」

「寝食を忘れる、ということがありますので」

「ちゃんと食べよう？」

「ですので、こうして……。それでも、台所に立つ機会には恵まれません。去年よりも少なくなっていると思います……。立たないと、という思いはあるんですが。立つ時間すら短くしようと考えている時があります。つまり、簡単に手軽で美味しい料理を作れるようになりたいんです」

文香はそう言って、レシピ本の適当な頁を開けスタイリストに見せる。工程は三つ四つしかない。他のレシピ本では、やれ下拵えだとか書かれており、不慣れな文香には難しいことだらけだった。

「ラジオでこの話はやめましょう。文香ちゃんの生活が心配されるわ。それに、アイドルが

そういうことを話すのも、ね？」

「そういうものなのでしょうか？」

「そういうもののなのよ」

スタイリストはそれ以上レシピ本についての言及はせず、最後の本を手を取った。ある写真家の大型の写真集。スタイリストの髪的先から隠してしまう。文香はゆっくりと本を取り返すと、話す。

「今日が表紙の撮影だと教えられたので、何かの助けになるのではないか、と鞆に入れた一冊です」

「写真集って……他にあったんじゃない？　こう、ほら、普段読んでいる本とか？」

「普段読む本は変わりますので……」

「好きな本とかは？」

「好きな本はこちらに」

と、文香は電子書籍リーダーを見せる。スタイリストは堪らず吹き出したようだった。文

香は気にせず、写真集の話に戻る。

「その写真家は私が生まれるずっと前にヨーロッパで活躍した写真家です。戦争写真家と呼ばれることもあれば、報道写真家と呼ばれることもあったそうです。ですが、私は写真について詳しい知識を持ち合わせおりませんし、世界史についても詳しくありません。この写真集に収められている写真について分かることの方が少ないと思います」

「分からない本も読むの？」

「分からないと出会うのは大事なことです。分からないを分かろうと知るために、また本を読みます。この写真集を読んで、幾つかの戦争に関する書籍を読みました」

「それで、写真について分かったの？」

「いえ、まだ分からないことだらけです。ですが、それでも、この写真の魅力は伝わってきます。迫力、と言い換えてもいいのかもしれませんが。あるいは、もっと別の表現か……。光への感覚が違うんでしょうか？ 陳腐な表現かもしれませんが、私とこの写真家とは見ている世界が違うと分かったんです」

文香は一呼吸置き、続ける。自分の先程までの心境を訴えかけるかのように。

「戦争写真家と呼ばれるように、戦争中の写真が沢山あります。海岸で匍匐前進をする姿を捉えることもあれば、傷付いた方の治療を懸命に続ける衛生部隊の姿もあります……頁を捲れば捲るほど、沢山の記録が見えます。痛々しい記録の数々です」

瞳の奥に熱が帯びる。鼻先に微かな痛みが覚える。頬に熱が集まり、熱くなる。それでも、不思議と胸には朗らかな気持ちで満ちていた。熱い頬に、何故だか笑みが浮かんでくる。笑顔の子供達に引き寄せられたような、笑顔だった。

「ですが、その中に、そういう争いの中でも生きようとする人々を撮っています。笑顔の一般人を撮れています。写真家という職業の方が、一般的にどう思われているのか私にはまだ分かりません。ですが、こうして過酷な環境下で笑う人々を撮る。その凄さは、十二分に伝わってきます」

文香はそう言って、本を閉じた。同時にプロデューサーの声が上がった。カメラマンが階段を駆け上がる。烈しい足音がスタジオに響く。文香は驚き、二人に目を遣った。

「鷺沢さん、場所を変えましょう。もっと良い写真を撮れます」

プロデューサーの指示を受け、二階へ上がるうとするが慣れないヒールでは早足も難しかった。階段の前で待っていたプロデューサーは、文香の手を取り、ゆっくりと共に階段を登ってくれる。踵から、高い音が響いてくる。心臓が、跳ねる。プロデューサーの汗ばむ手に、震える指が重なる。プロデューサーは、笑っている。

「鷺沢さん、急がなくて大丈夫です。これからすることは、昔話です。あるいは、懐かしい本の話です」

二階のスタジオはシックやクラシカルという言葉通り、セットが組まれていた。クラシカルなスタジオは、どこかの純喫茶を思わせる作りだった。文香はプロデューサーに手を取られたまま、ソファ席へ案内された。正面のソファの向こうには、カメラマンの姿があった。レンズが、じっと文香を見ている。プロデューサーがレンズを隠すように文香の正面に座った。スタイリストが、二人分の珈琲を持ってきてくれた。

戸惑う文香に、プロデューサーは一冊の本を取り出した。

「この本を、覚えてますか？」

どこにでも売っている文庫本だった。しかし、この世のどこを探しても見当たらない本だった。あれはまだ、文香がまだアイドルになっていなかった頃。叔父の手伝いで店番をしていた時、この人が足を運んだ。雨の日、レコードをかけて読書に耽ける楽しみを奪った人。この人は本を探していた。ただの本ではなく、面白い本を。文香は何冊もの本を紹介し、その中から選ばれたのが、この本だった。

「面白い小説でした」

「今になって思うと、その小説を薦めたのは間違っていたように思えます」

「あの時は僕もあなたも、何も知らなかったから仕方ありませんよ。鷺沢さん、今でしたら、どのような本を？」

プロデューサーにそう尋ねられ、文香は少し考えた。理数分野の本はきっと面白くないだろう。同じプロダクションの先輩から教えられたことなのだが、この人は何かの研究や開発に携わっていたらしい。その分野は文香も疎く、むしろプロデューサーに何かお薦めの本を

教えてほしいぐらいだ。

となると……その時、文香は、プロデューサーが雨を好きと言っていたことを思い出した。そうして、ある一冊の本のことを思い出した。ある日、本屋で見掛けた文庫本。

「プロデューサーは、雨が好きでしたね」

「雨も、好きです」

「でしたら、もっと好きになれる本があります」

「どんな本でしょうか？」

「雨の辞典です」

「……は？」

「見たことありませんか？」

「雲の辞典でしたら見たことがありますけど……？ 雨？ えっと、雨？ あの雨ですよ

ね？」

再三の確認を取るプロデューサーに、文香は微笑した。それから、こう続ける。

「私が今お伝えした本は辞典です。ですが決して分厚い本ではありません。文庫本で薄い本です。分かりやすく言ってしまえば、類語辞典でしょうか。雨の言葉を集めた辞典です」

文香はその辞典で初めて知った雨の言葉を、プロデューサーに伝える。プロデューサーは子供のように嬉しそうに笑い、文香も嬉しくなった。優しい調子で、その辞典と関係するよ
うな歳時記の話や俳句集の話もした。

シャッターはいつの間にか切られていた。

自然と笑う文香の姿が、そこにはあった。端に珈琲を置き、本を挟んで楽しそうに話す文香の姿が。

※

鷺沢文香はその日、街中の大型書店に入った。つば広帽子を目深に被り、大きな伊達眼鏡をかけて。書店の入り口には、新刊コーナーがあった。文香は新刊コーナーの前で足を止め、

目当ての本を探した。幾度となく見た自分の姿は、平積みにされており、書店員が作成したポップ広告があった。そこには、ラジオで発表された時から待っていました、という言葉があった。文香の胸が大きく跳ねた。笑みが零れる。

表紙撮影を終えてからは、早かった。新たな年を迎えた頃には半分になり、一月が終わる頃には初稿を終え、ひたすら誤字脱字を潰していた。校正の方に原稿が回り、赤入れをされたり、自分が表紙になっているゲラを見たりと、幾つもの確認作業が続いた。

梅の花が零れ、桜の花が開くようになった頃、鷺沢文香の姿が書店でも見掛けられるようになった。

文香は確かな充足を覚え、何冊かの本を購入した。書店から出ると、外は麗らかな日差しに満ちていた。寮に戻って本を読むのも良いが、どこかの公園で一冊程度読んでもいいだろう。そんなことを考えていると、ある女性から声をかけられた。

「あの、鷺沢文香さん、ですか？」

文香は眼鏡越しに女性を見た。女性の手には書店の袋があった。文香は声を潜め、女性よ

りも臆するように答えた。

「はぁ、そうですが……?」

「あつ、あ、あの、本、買いました。ラジオも毎週聞いてます。いつも、素敵なお話、ありがとうございます」

「お礼を言うのは私の方です。ありがとうございます。貴方のお陰です。良い本は、ありませんか?」

上ずった女性の声に、文香の顔は真っ赤にして、笑った。

さぎさわふみ か はなし
鷺沢文香のほんの話

発行日 2019年2月11日 初版

原作 アイドルマスターシンデレラガールズ

印刷 ちょ古っ都製本工房

発行者 こんどうたかや しゅつらんぶんこ
近藤貴弥 (出藍文庫)

連絡先 stk7.920521@gmail.com

※本書の無断転載・複製・無断販売等を禁じます。